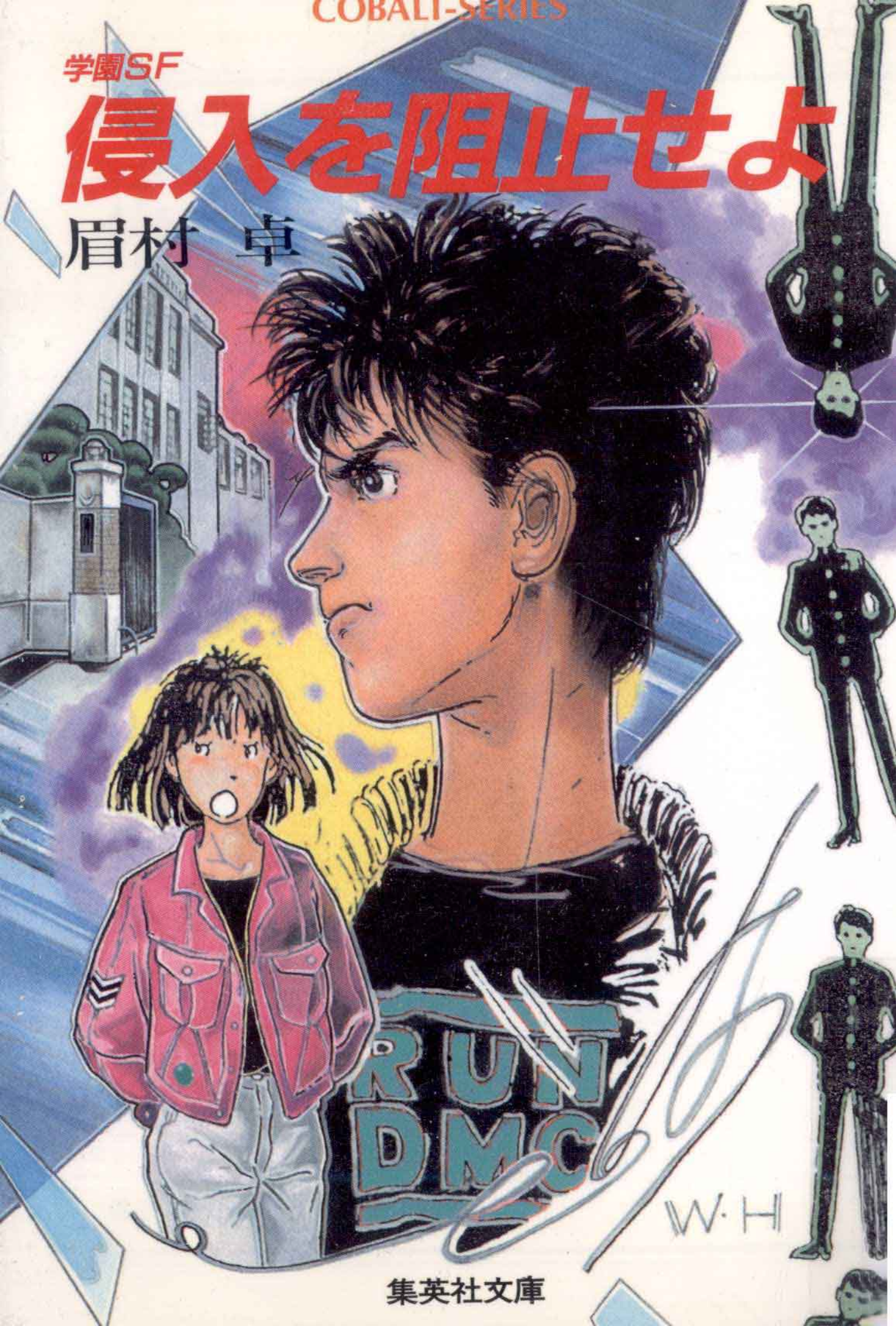
COBALT-SERIES

学園SF

侵入を阻止せよ

眉村 卓



集英社文庫

まゆむら・たく

昭和９年10月20日，大阪生まれ。大阪大学経済学部卒。日本ペンクラブ，推理作家協会，ＳＦ作家クラブ会員。『消滅の光輪』『なぞの転校生』『ねらわれた学園』『思いあがりの夏』『地獄の才能』『ねじれた町』ほかコバルトシリーズに『逃げ姫』『孔雀の街』『月光の底』などがある。趣味は写真を撮ること。柔道。

侵入を阻止せよ

COBALT-SERIES

昭和61年12月15日　第１刷発行

★定価はカバーに表示してあります

著者　眉村　卓

発行者　堀内末男

発行所　株式会社　集英社

〒101　東京都千代田区一ツ橋２－５－10

電話　東京　(230) 6171（販売）
(230) 6268（編集）

印刷所　凸版印刷株式会社

© TAKU MAYUMURA 1986

本書の無断複写・複製・転載を禁じます。

落丁・乱丁の本はご面倒でも小社製作課宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

COBALT-SERIES

学園SF

侵入を阻止せよ

眉村　卓

集英社文庫

眉村卓(日)所著的因是小说
讲述在节日之前突然看到暂停
举行婚宴所收到节日所举行
所努力的全短篇。

目　次

侵入を阻止せよ

一、黒い挑戦者……5

二、真夏の標的……65

三、侵入を阻止せよ……125

あとがき……263

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

カット／若菜　等

一、黒い挑戦者

1

山崎一歩が来たとき、もう食堂の窓口には長い行列ができていた。みんな、押し合うようにして並び、自分の食べるものを手に入れると、空いた席へと急ぐのだ。

（遅かったか）

一歩は舌打ちした。

四時間めの英語の大久保先生が、時間ぎりぎりまで授業したせいである。終わるや否や教室を出たのだが……もうこの有様なのだ。

一歩は仕方なく、三つある行列の、一番人数がすくなそうなところにくっついた。

あとからもばらばらと、同じ二年三組の連中がやってくる。

一歩のうしろに並んだのは、柿沢冬吾だった。

「全く、あの先生には参るよなあ」

冬吾は一歩にいった。「四時間めぐらい、もうちょっと早く済ませるのが、武士の情けとい

うもんじゃないか。おれ、腹減って死にそうだ」
「おまえ、滅茶苦茶食うからなあ」
一歩はいい返してやった。冬吾とはどういうわけか中学時代ずっと同じクラスで、この陵北高校に進学してからもそうなのだ。だからよく知っている。冬吾は高校で柔道部に入って、いよいよ大食いになったようだ。が、そのわりに太らないのは、体質かもしれない。
といっても、もちろん一歩のほうが痩せていて、背も高いのであるが……。
「おばけみたいにいうな。食べないと体力が保たないんだ」
冬吾が口をとがらせる。
それでも列の進みかたは速く、一歩たちはじきに窓口に到達した。
事前に握っていたお金を出して、一歩はカレーライスを受け取った。
冬吾は天丼と卵丼で……両手にひとつずつ持つのである。
「あそこにしよう」
と、冬吾。
ふたりは、奥のテーブルに向き合ってすわった。
食べはじめる。
一歩がカレーライスを三分の二ほど食べたとき、冬吾は卵丼を平らげていた。
「おまえんとこ、展覧会をやるんだって？」

天丼を引き寄せながら、冬吾がたずねる。

「やるよ」

一歩は答えた。

冬吾がいっているのは、五月に行われる学園祭のことだ。

学園祭だから、生徒会本部企画の講演会や、演劇部の公演、ロック同好会の演奏会などがある。が、大半はクラス単位、クラブ単位、あるいはグループによる模擬店づくりになるのがつねであった。二十年か三十年昔は、各クラブがそれぞれ趣向をこらして展覧会をやったそうだけれども、今ではそんなものははやらない。わずかに美術部あたりが作品展をするくらいのものである。

一歩は、文芸部員だった。

それも今月……二年になったばかりだというのに、部長にされてしまったのだ。

もともと、文芸部なんて弱小クラブの典型みたいなものである。クラブ活動がさかんな陵北高校には、運動部・文化部合わせて四十近いクラブ・同好会があるが、生徒会から配分される年間予算の順位は、つねに三十一、二番めであった。部員だって卒業生が抜けた現在では、七人しかいない。しかも新三年生がゼロ――となれば、これまで一番エネルギッシュに作品を生み出していた一歩が部長に選出されるのも、仕方のないところである。

ただ、部員たちは熱心だった。

このままでは部が潰(つぶ)れてしまう、との危機感もあった。

で……一歩が学園祭に展覧会をやろうといいだし、みんな、とにかく頑張(がんば)ってみようということになったのだ。

どこか時代錯誤(さくご)の観があるのは、承知の上である。

馬鹿にする者もいるだろう。

しかし、これで文芸部の存在を示すことはできるのではないか？

ともかくやってみるべきなのだ。

「おまえなあ、文芸部の展覧会なんて、見にくるやつなんかいないぜ」

冬吾はずけずけという。「展覧会って、一体何をやるつもりだ？　本でも並べるのか？　そんなことして、何になるんだ？」

「いいさ。ほっといてくれ」

一歩は応じた。

「何をするにしたって、展覧会をやるとなりゃ、大変だぜ」

冬吾はやめない。「文芸部って、女のほうが多いんだろう？　あてになるのかね」

たしかに、文芸部は男子二名、女子五名なのである。

「ま、何とかなるさ」

一歩は答えた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

何とかなる、というより、何とかやりとげなくてはならないのだ。

「おまえ、頑固だからなあ」

冬吾は、呆れたようにいった。

一歩は、黙ってカレーライスのスプーンを口に運ぶ。

彼には、冬吾が悪気でそんなことをいったのではないことが、よくわかっていた。冬吾は率直なだけなのだ。彼と冬吾の組み合わせというのは、一見妙なようだけれども、お互いにないものを持っているから、気が合うのかもしれない。

ふたりは食べ終わり、食器を戻しに行こうと立ちあがった。

「おい、あいつら、何だ？」

と、冬吾が彼をつついたのは、そのときである。

何列も長いテーブルが並ぶ食堂の、入り口に近い側の席に、詰襟の学生服の生徒が三人いて、食事をしている。

わざわざ学生服とことわったのは、陵北高校には制服の定めがなく、服装は自由だからなのである。これは陵北高校の、生徒の自主性を尊重し自律心に期待するという伝統のあらわれだった。ついでにつけ加えておくならば、いくら自由だといっても他人をないがしろにしたり、生徒の本分を無視したりする者は、生徒たち自身によって非難されるので、このことが公立高校でありながら独特の校風を作っているのだ。

従って、一歩や冬吾もまたラフな格好だし、みんなまちまちの服装だ。女生徒の多いあたりはなかなかカラフルである。

といっても、学生服を着用することもまた自由なのだから、少数派とはいえ、詰襟の者もいれば古典的女子学生スタイルの者もいるのだった。ただ、少数派だから目につきやすいのは否めない。

三人はその詰襟姿で……しかも、まるで体操でもしているように、背をぴんと伸ばして首だけを前に曲げ、同時に腕を動かして、カレーライスを食べているのだった。

「変なやつらだな。まるで機械だ」

冬吾が、くすっと笑った。

彼には、しかし、どうも笑っていられない気がした。何となく異様な感じだったからである。

食堂を出ようとして、彼は、もう一度その三人を見た。

陵北高校では、入学年度で学校のバッジの色が違っている。それで何年生か分かる仕組みなのだ。

三人は、一年生であった。

2

放課後。

部会が開かれる第九教室へ行く前に、一歩は生徒会本部に立ち寄った。

学園祭で催(もよお)しをする団体の責任者は、資料を渡すから取りに来ること——と、掲示が出ていたのである。

生徒会本部は、北館三階の端(はし)っこの小さな部屋だ。

来てみると、もう十数名の男女生徒が集まって、執行部の役員から資料を受け取ったり、質問したりしているところだった。自分のところの場所が悪いと抗議している者もいる。

一歩は人々をかきわけるようにして、前へ行った。

「文芸部ですが」

いうと、役員のひとりが資料を渡し、受け取りのサインをするようにと求めた。

もらって、ざっと目を通す。

文芸部の展覧会場は、希望どおり、いつも部会を開く第九教室になっている。

展覧会なのだから、学園祭の期間の土、日を通しで使えばいい。他の催しのように時間の割り当てなどはないのだ。

あと、関係のあることといえば、おしまいの注意事項ぐらいだが……斜め読みすると、常識的な事柄ばかりであった。

ま、問題はないだろう。

あとで気がついたら、また生徒会本部へ行けばいいのだ。

一歩は、まだあとからやってくる連中に逆流して、生徒会本部を出ようとした。

「山崎さん！」

うしろから、呼ぶ者がある。

振り返ると、四組の荒木千映子だった。

千映子は、演劇部長である。

派手な顔立ちで目も大きい。陵北高校の男生徒の中には、彼女のファンもすくなくないようだ。

そんな千映子と、比較的地味なタイプの一歩が話し合うようになったきっかけは、四月早々に行われたクラブ予算配分会議である。どうしても運動部のほうに多くなりがちな予算案に対して、一歩は、どうせ駄目だとわかっていたものの、文化部はこれでいいのか、と論陣を張ったのだった。傍聴に来ている運動部員たちが、黙れ！　ひっこめ！　なぐられたいのか！と、脅迫じみた野次を飛ばす中で、である。結局文芸部は例年のように、ごく僅かの予算しか獲得できなかったが……会議のあと、荒木千映子が、よくいってくれたわ、と、話しかけて

きたのだ。話し合ってみると千映子は、演劇部だから当然のことだろうが、本もよく読んでいて、手応えがあるのがわかった。以後、ふたりは気軽に口をきき合うようになっている。

もっともありていにいえば、文芸部では彼は、千映子の話はしないことにしている。男生徒に人気のある千映子に対して、文芸部の女生徒らは、必ずしも好意的ではなかったからだ。このへん、むつかしいところなのである。

追いついた千映子は、やはり手に、生徒会本部が作成した資料を持っていた。

「ちょっと……お願いがあるんだけど」

千映子はいう。

「とは？」

彼は反問した。

「歩きながら、話さない？」

と、千映子。

そういえば、あたりは、生徒会本部へやってくる人々で、混雑しているのだ。

ふたりは廊下を並んで歩きだした。

「実はね」

千映子は切り出した。「山崎さん、柔道部の柿沢さんと親しいんでしょう？」

「ああ」

なぜここで冬吾の名が出てくるのか、と、怪しみながら、彼は応じた。
「その柿沢さんに、頼んでほしいんだけど」
千映子はいう。「今度の演劇部の公演に、特別出演をしてくれないかって」
「特別出演？」
彼は、目をぱちくりさせた。
「そうなのよ」
千映子は頷（うなず）いた。「今度の芝居ね、暴漢が主役にからんで、主役に投げ飛ばされる場面があるの。それも派手に、ね。演劇部のメンバーでは、うまくやれる者がいないのよ。へたをすればけがをするし……。柔道部員なら本職でしょう？」
「それはそうだけど」
一歩は首をひねる。「しかし、どうして柿沢が？　あいつがうんというかなあ。それに、ひょっとするとそのためには、柔道部の許可もいるかもしれないし」
「柿沢さん、その暴漢のイメージにぴったりなのよ。それに山崎さんの友達だから、何とかなるかと思って……どうかしら」
と、千映子。
「そりゃ話すだけは話してみるけど……あいつがうんといったとしても、演技力があるとは思えないがなあ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com